

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本語・ウズベク語授受動詞に関する対照言語学的考察
Author(s)	ハサノワ ローザ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 23期 : 26 - 39
Issue Date	2009-01-09
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038809
Right	
Relation	



日本語・ウズベク語授受動詞に関する対照言語学的考察

ハサノワ・ローザ

はじめに

やりもらいは日常よく生じる行為なので授受動詞の自然な使い方がとても大事である。不自然な使い方は誤解の理由にもなってしまうことがあるので、学習の時、色々なニュアンスに注意しなければならない。言語は思想、考えの現れであり、文化の一部であることは言うまでもなく、目に見えない文化とも言える。従って、言語を学習する際にはその言語の母語者の考え方、習慣、生活も考慮しながら学習した方が分かりやすい。

日本で留学している間、日本語を通じて日本人の文化も学んできた。来日したばかりの頃、色々な手続きなどで以前あまり聞いたことのない表現を耳にしたり、迷子になってしまったり、道を尋ねた時「てもらう」の表現を聞いたりしたのだが、以前習った表現がこういう風にも使われることがあると知らなかった。そのような表現の使用方法が分からなかった私は授受動詞の使い方を調べてみる必要があると思って、研究のテーマにした訳である。この研究は日本語の授受動詞をウズベク語と対照した研究なので、ウズベク人日本語学習者にも日本人ウズベク語学習者にも役立つであろう。

「やりもらい」は *give, receive* と訳されるので日本語の学習者は授受動詞の不自然な使い方をよくする。また、授受動詞の使用が必要な場合に授受動詞を使わずに不自然な日本語となってしまうこともある。日本語の授受動詞には恩恵、利益の意味以外にいくつかの意味もあることについても本文で扱っていく。

日本語とウズベク語は文法が類似しているため、ウズベク語母語者にとって日本語は易しいと思われるが、実際は両方の言語にもニュアンスの違いなどがあって、日本語学習者には誤用とか不自然な表現がよくみられる。

本論文では背景にある日本の文化の要素を考慮しながら授受動詞について考察を行う。

2. 日本語の授受動詞

2.1 「やる／あげる」「くれる」「もらう」

授受動詞は物の移動を表すために使う動詞である。同じ授受行為は与える側と受け取る側の二つの視点から表現することができる。日本語の授受動詞の特徴は授受動詞に3つ種類があることである。授受動詞には「やる／あげる、くれる／くださる、もらう／いただく」の三つがあり、動詞によって物の移動の方向がきまる。

日本語の授受動詞は多くの場合行為による恩恵、利益を表す機能を持っているが、そうではないこともあり、被害を表す皮肉を表す用法もある。そういう側面には注意が必要である。ウズベク語の授受動詞と対照する前に日本語の授受動詞の使い分けを見ていく。

日本語の授受動詞「あげる」「もらう」「くれる」の用法

あげる：1人称→2、3人称； 2人称→3人称； 3人称→3人称

くれる：2、3人称→1人称

もらう：1人称←2、3人称； 2人称←3人称； 3人称←2、3人称

授受動詞の文章には視点の位置が大事である。例えば、「あげる」の文章で視点はあげる人にあり、あげる人は主語である（主語は下線で示されている）。一方「もらう」の文章で視点はもらう人に置かれているので、主語はもらう人である。「くれる」もあげる人が主語になるが、話し手（私）、話し手の身近な人しか受取り手にならない。

上記の表のように「あげる」では1人称、2人称、3人称とも与え手になれるが、1人称はもらう人（受け取る人）になれない。

例：私はバレンタインデーに田中くんチョコをあげた。（○）

田中くんは私にホワイトデーにチョコをあげた。（×）

「もらう」では1人称、2人称、3人称とも受け取る（もらう）人になれるが、1人称（私）はあげる人（与える人）にならない。

例：私はホワイトデーに田中くんチョコをもらった。（○）

田中は私にバレンタインデーにチョコをもらった。（×）

従って、「あげる」と「もらう」では1人称（私）が主語としてしか使わない。

「くれる」では主語があげる人であるが、話し手の私主語になることがない。

例：私は田中にチョコをくれた。（×）

田中は私にチョコをくれた。（○）

2. 2 授受動詞の「うち」「そと」の問題

人間の意識には周りの存在、社会を自分に近い、遠くにわけるといった概念があるように、日本の文化にもいわゆる「うち」と「そと」という文化の側面がある。自分を中心として社会、人間関係を「うち」と「そと」に分ける。この日本の「うち」と「そと」は言語にも強い影響を与えてい

る。簡単に言えば、日本語では家族、親戚、自分の会社の人などを話し手（私）に所属する者「うちの人」にし、発言も「うち」の概念に基づいて作られる。「そとの人」は「うちの人」の反対である。この「うち」「そと」は物理的な区別というより、話し手の意識の問題である。言語は思想、世界観の現れだと言える。

あげる - (あげる人) は (もらう人) に物をあげる

例: (1) (私は) 尚子ちゃんにケーキをあげた。

(1') 瞳さんは尚子さんにケーキをあげた。

くれる - (あげる人) は (もらう人) に物をくれる

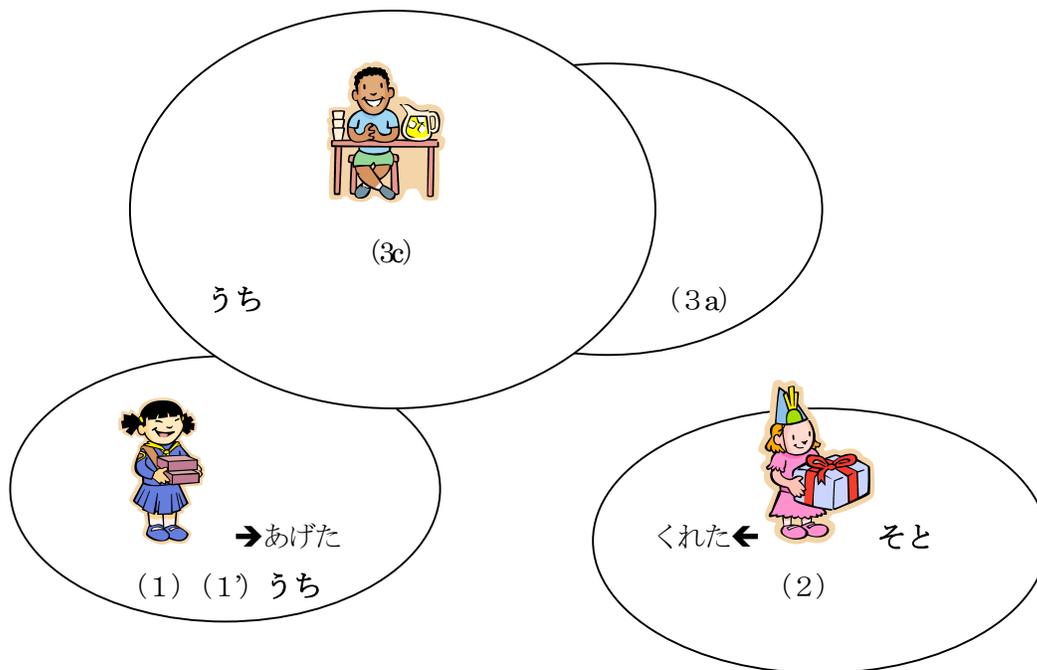
例: (2) 尚子ちゃんは (私に) 可愛い人形をくれた。

もらう - (もらう人) は (あげる人) に物をもらう

例: (3) 私は尚子さんに可愛い人形をもらった。

(3') 瞳さんは尚子さんから可愛い人形をもらった。

尚子さんは瞳さんにケーキをもらった。



(1) のように話し手からみた文章で、物の移動がうち（話し手、私＝瞳）の方からそとへ向かっているなら「あげる」を使う。

(1) のような話し手があげた人に視点を置いて2人の第3者のやりとり行動を述べる場合「あげる」を使う。ここでうち／そとは問題にならない。

(2) のように話し手からみた文章で物の移動がそとからうちへむかっているなら「くれる」を使う。

(3) の例は第3者間での授受の表現（受け手側に視点がおかれた表現）で、「もらった」が使われている。

しかし3a) の場合、ちょっと違う意味になる。

3a) 尚子さんは瞳ちゃんに可愛い人形をくれた。

この場合は瞳が話し手にとって身近な者だと解釈される。瞳さんは話し手のうちの者として扱われているのである。

もう一つの例を見てみよう。

妹が次郎に本を渡した。伝達するのは話し手（私）である。

(4a) 妹が君にこの本をあげた。

(4b) 妹が君にこの本をくれた。

(4a) では次郎にたいして「あげる」が使われているので、次郎は話し手にとってそとのものだと分かる。

(4b) で「くれる」が使われているので次郎は話し手にとってうちのものであると解釈される。

2. 3 「やる」「あげる」「くれる」の方言的な使用

「やる／あげる」

やる／あげる動詞の区別は自分より下にあるものに対して「やる」を使用する、「あげる」は中立的で、目上の人に対してなら「さしあげる」の使用だと教えられるが、実は「動物に餌をやる」、「植物に水をやる」と言うような場合「やる」のかわりに「あげる」を使う人が多い。それを理解するために日本人は人も大地も自然のすべてが神から生まれたと長く信じて来たことも考慮した方がいいだろう。それに子供は家、家族で使われる言葉使いになれているから、日本人にとっては動植物に対して「あげる」の使用は当然のことである。すべてのものは平等であり、相互に尊重の態度を取るべきだとされる日本では、動植物に対しても「やる」より丁寧な「あげる」を使用することも理解できる。

例：馬に餌をあげる。

花に水をあげる。

このような場合「やる」を使っても間違いではないが、「あげる」の方が丁寧だと考えられる。

*授受動詞の用法には方言の違いもある。例えば、長野県では話者が相手に与えるとき「あげる」の意味で「くれる」を使うらしい。

例えば：共通語で 「これ（君に）あげるわ」

長野県で 「これ（君に）くれるわ」

「欲しいならくれるよ」という方言的な授受動詞の使用もある。

「くれる／くださる」

この動詞の基本的な意味は「ソトの人が話者、または話者のウチの人に物を恩恵として渡す動作」の意味である。

共通語で「くれる／くださる」の動詞は受け手が1人称になる場合が多いが、方言で「あげる」の意味で使われることもある。

例えば：犬に餌くれる という例もある。

日本語の授受動詞は本来、恩恵の意味を持っているので、一部の授受行為には「もらう／あげる／くれる」の動詞を使うことができない場合がある。恩恵の関与しない行為や、不利益になる行為、物の単なる受け渡しなどには「やりもらい」の動詞は不適であることに注意が必要である。

駅前で道行く人にチラシをあげる（？）（単なる渡し）←チラシを渡す（○）

洪水で多くの人が被害をもらった（？）（不利益になる行動←被害を受けた（○）

先生が落第点をくれた（？）（恩恵の関与しない）←落第点を与えた（○）

2. 4 授受動詞敬意

日本語の三つの授受動詞には敬意を表す形（待遇形式）がある。

非敬意

やる、あげる

くれる

もらう

敬意

さしあげる

くださる

いただく

「さしあげる」では敬意の対象は受け取る人、「くださる」では与える人、「いただく」では与える人である。

「さしあげる」

1人称→2、3人称

- (1) 先生の奥様に花束をさしあげました。
- (2) 先生にお土産をさしあげます。

2 人称→3 人称

敬意は受け取る人に対してであるなら、「さしあげる」を使うが、与え手に対する敬意であれば「おあげになる」を使う。

- (3) 先生の奥様に花束をさしあげたの？
- (4) お土産をだれにおあげになりましたか？

* 「おあげにする」の形はない。

3 人称→3 人称

3 人称の間での授受を述べる場合、中立的に「あげる」を使うが、どちらかの方に敬意を表す場合は「さしあげる」と「おあげになる」を使う。与え手に対する敬意であるなら「おあげになる」、受け手に対する敬意なら「さしあげる」が使用される。

- (5) 山田先生は田中先生にお土産をおあげになりました。
- (6) 山田先生は田中先生にお土産をさしあげました。

「くださる」

2、3 人称→1 人称

- (7) 先生の奥様は絵をくださいました。

* 「おくれになる」の形はない

「いただく」

1 人称←2、3 人称

- (8) 先生の奥様に絵をいただきました。

受け手は「私」であり、与える人は敬意の対象であるなら「いただく」を使用する。

2 人称←3 人称

- (9) 君は先輩に何をいただいたの。

敬意は与える人に対する敬意である。敬意は受け手に（聞き手）に対するならば、「おもらいになる」を使う。

- (10) その本を誰におもらいになりましたか。

* 「おもらいする」の形はない。

3. 日本語の授受動詞とウズベク語の授受動詞の対照

	日本語	中立形	丁寧語
ウズベク語			
	やる／あげる	やる／あげる	さしあげる
bermoq		bermoq	bermoq
	くれる／くださる	くれる／くださる	くださる
bermoq		bermoq	bermoq
	もらう／いただく	もらう／いただく	いただく
olmoq		olmoq	olmoq

「やる／あげる」「くれる／くださる」対 bermoq

両言語の授受動詞の対応関係を見ると、日本語の「やる」「あげる」「くれる」の3つに対してウズベク語は「bermoq」の一つが対応する。日本語では「やる／あげる」と「くれる／くださる」は受け手と与え手の違いによって使い分けられる。「くれる」の場合受け手は1人称（私）あるいは内の人のみであるのに対して、「やる／あげる」の場合は受け手が1人称以外のものになることがある。

例： 彼は私（妹）に本をくれた。 U menga kitob berdi.
 私は君に本をあげた。 Men senga kitob berdim.
 君は彼に何をあげた。 Sen unga nima berding?
 彼は次郎に本をあげた。 U Jiroga kitob berdi.

*ウズベク語の文章の順序は日本語の文章と同じく SOV (subject object verb) 型で、主語が前に、動詞が文章の終わりにくる。ウズベク語の動詞は人称、時制によって固有の語尾を持っている。

この文章での単語： U—彼、 men—私 menga—私に、 kitob—本、
 Bermoq—くれる／あげる、 berdi(3人称)—くれた（過去形）、
 senga—君に、 berdim(1人称)—あげた（過去形）、
 nima—何、 berding—2人称に対して使う「あげる」の過去

ウズベク語には「くれる」と「あげる」の区別がないので日本語の学習者にとって難しい点の一つである。

「もらう／いただく」対 olmoq

「物や恩恵を頼んだりして自分のものとする」の意味を持つのは、ウズベク語では olmoq。だが、「もらう」の敬意を表す「いただく」の形がないから、日本語の二つの動詞にウズベク語の一つの動詞が対応する。

友達から本をもらった。 Dustimdan kitob oldim. (Dust—友達、Dustimdan—友達から、kitob—本、oldim—もらった)

先生から本をいただいた。(敬意を表す文章) —Ustozdan kitob oldim. (Ustoz—先生、Ustozdan—先生から)

4. 補助動詞としての授受動詞

物の授受ではなく、行為によって恩恵を受ける場合は「～てくれる／いただく」、「～てやる／あげる」、「～てもらう／いただく」の複合動詞が使用される。「誰かのために恩恵的に何かをする」ということを表現する場合、動詞を「て形」にして「あげる」「もらう」「くれる」を付ける。この「行為の授受」の文型には、ある人が他の人に対して「好意的に行為をする」あるいは、その行為を受ける人がその行為から利益を得るという意味（語感）が含まれる。

私は鈴木さんに本を送ります。 (事実を客観的に述べている)

私は鈴木さんに本を送ってあげます。 (好意による行為を表わす)

友達に本を送ってもらいます。 (好意による行為を表わす)

友達は本を送ってくれます。 (好意による行為を表わす)

4. 1 「～てあげる」「～てくれる」

「～てやる／あげる／くれる」の主語が行う行為は受け手にとって有益であることを表す。

(1) 私は真由美にセーターを編んでやった。

(2) 私は真由美さんにセーターを編んであげた

(3) 私は真由美さんにセーターを編んでさしあげた。

(4) 岡さんは私にセーターを編んでくれました。

目上の人に対して「重そうだね。持ってあげましょうか」「傘貸してあげましょうか」などの不自然な表現をする学習者もいる。動作に使われる「てあげる／さしあげる」は押し付けがましく聞こえるので、相手に不快感を与えてしまうことがある。行為者の方が明らかに目上であって、行為者が恩恵を与えることができることを明示化しても面子を失わないような相手以外に対しては「～てやる／あげる」の使用を避けた方がいいと考えられる。そのような場合、「てあげる／さしあげる」を用いずに、次のように別の表現を使うことが多い。

(4) 持ってあげましょうか→お持ちいたしましょうか／持ちましょうか。

(5) 傘貸してあげましょうか→お貸しいたしましょうか／貸しましょうか。

ウズベク語で日本語の「てくれる」と「てあげる」のように区別がないので、両方にも一つの「~b bermoq」が当てはまる。しかし、日本語の「~てくれる／くださる」はウズベク語で常に「~b bermoq」と訳するわけではない。

(1) 料理を作ってくれた／Ovqat pishirib berdi.

(Ovqat—料理； pishirmoq—作る、pishirib—作って； berdi—くれた)

命令の意味で使われる日本語の「~てくれ／ください」ウズベク語で「~b bermoq」なしで言う方が多い。

(2) 私の代わりに書いてくれた。／Meni urnimga yozib berdi.

(Meni—私の； urnimga—代わりに； yozmoq—書く、yozib—書いて； berdi—くれた)

(3) 早速仕事を始めてくれ。／Tezda ishni boshla.

(Tezda—早速； ishni—仕事を； boshlamoq—始める、boshla—始めろ／始めてくれ)

4. 2 「~てもらう」

「~もらう／いただく」は行為の受け手の側を主語にして、その行為が、受け手の恩恵となることを表す表現である。

行為を行う人は基本的に二格で表す。主語である恩恵を受ける人は普通話し手であるので、省略されるのが普通である。上の人から受けるときは「いただく」、対等の人、および、下の人からは「もらう」を使う。

(1) 私はセムさんに英語を教えてもらった。

(2) 私はラコフ先生に英語を教えていただいた。

「~もらう／いただく」の表現の話し手である主語を行動を行う人に変えて言い替えることもできるが、その場合、恩恵の意味が薄れる。

(4) 洋子さんに資料を送ってもらいました。

(5) キムさんに道を教えてもらいました。

(4') 洋子さんは私に資料を送りました。

(5') キムさんは道を教えました。

(4) と (5) の文章には、その行為が話し手にとって有益であったという価値判断が含まれるが、(4')、(5') は単なる事実の記述であって、そこに価値判断は存在しない。

* 「くれる もらう」は同じ意味の文を表すことができるように思えるが、必ずしもそうではない。

例えば：

a) レナさんは私にロシア料理を作ってくれた。

b) 私はレナさんにロシア料理を作ってもらった。

a)の「作ってくれた」の場合は私別に頼んでいなかったけど、レナさんは自分の意志でロシア料理を作ったと言う意味になる。恩恵の意味が強い。

b) 「作ってもらった」の場合は私がレナさんにロシア料理を作ると頼んだのでレナさんは私の依頼にこたえて作ったという意味になる。有益の意味が強い。

だから次の場合は「～てくれませんか」を「～てもらいませんか」と置き換えることはできない。

× ロシア料理を食べてみたかったけど、レナさんに作ってもらいませんでした。

○ ロシア料理を食べてみたかったけど、レナさんは作ってくれませんでした。

「てもらう／いただく」は利益・恩恵を受けるという意味を表す以外にほかの機能も持っている。

4. 2. 1 『指示』の「～てもらう／～いただく」

「てもらう／いただく」の表現は依頼のように聞こえるが、実際は命令、指示の待遇的な形である。この表現は決定権が話し手にあるという特徴を持っている。これらは「～ください」「～願います」と言い替えることができるが、「～てもらう／いただく」の方が丁寧だと考えられる。

(6) ここにサインしていただきます。 ← ここにサインしてください。

(7) 9時に来てもらいます。 ← 9時に来てください。

ウズベク語には日本語の指示の「～てもらう」に当てはまる表現はなく、命令、指示の「～ください」とか「～するように願います」を意味する表現に訳される。

ここにサインしていただきます— Bu erga qul quishingizni suraiman/ Bu erga qul qiuing.

(Bu erga—ここに、qul quimoq—サインする、qul quishingizni—サインするように、suraiman—お願います／ qul qiuing—サインしてください)

指示の「～てもらう／いただく」は明示的な指示表現である「～ください」より丁寧だと考えられるが、「～ください」と同様に、聞き手に対して断るという選択肢は提示されておらず、基本的に聞き手は断ることができない。

4. 2. 2 『依頼』の「～てもらえる／～いただける」

(8) (女優に) サインしていただけませんか。

(9) 9時に来てもらえませんか。

指示表現の「～てもらう／いただく」と違って依頼の「～てもらえる／いただける」は原則として疑問の形で用いられるので断れる可能性があると考えられる。話者は何かするように頼むが、行為者がそれをするかどうかは不明である。「～てもらえる／いただける」の表現には利益は明らかに行為の「受け手」に向かう。

ウズベク語で日本語の依頼の「～てもらえる／いただける」は「～てくださいますか?」のように訳される。

サインしていただけませんか—Qul quib berolmaisizmi?

(Qul quib—サインして、berolmaisizmi—くださいませんか)

4. 2. 3 『願望』「～もらいたい」

(10) この本を読んでもらいたい。

(11) 英語を教えてもらいたい。

「～もらいたい」に意味的に近い「てほしい」文型がある。

(12) この本を読んでほしい。

(13) 英語を教えてほしい。

「～もらいたい」「てほしい」は話し手の願望を述べるのに使われるので、行為の受け手(私=話し手)が省略されることが多い。しかし引用節があれば話し手以外の願望の表現にも使える。

(10') この本を読んでもらいたいと花ちゃんが頼みました。(話し手以外の人の願望)

(11') 英語を教えてもらいたいと言いました。(話し手以外の人の願望)

(12') この本を読んでほしいと花ちゃんが頼みました。(話し手以外の人の願望)

(13') 英語を教えてほしいと言いました。(話し手以外の人の願望)

「～もらいたい」「てほしい」を「～てください」と言い替えることができるが、「～もらいたい」「てほしい」は間接的依頼で、「～てください」は直接依頼の表現である。「～もらいたい」「てほしい」は願望表現から依頼表現にずれ込んだ表現である。

日本語の恩恵の「～てもらう／いただく」の補助動詞はウズベク語にはない。

料理を作ってもらった。(恩恵) / ~~Ovqat pishirib oldim.~~ (ovqat 料理、pishirmoq 作る、pishirib 作って)

「～てもらう／いただく」は日本語の「～てくれる／あげる」を意味する「～b bermoq」と訳され

る。

料理を作ってもらった。／Ovqat pishirib berdi

* 補助動詞としての「～てやる／あげる」の基本的な意味は「恩恵を与える」という意味であるが、時に反対の「害を与える」意味で用いられることもある。

「恩恵を与える」

傘を貸してあげました。

駅まで送って行ってあげた。

これからこの子猫は家の家族よ。かわいがってやってね。

「害を与える」

殺してあげる／やる uldiraman/uldiradi

殴ってやる uraman/uradi

ひどい目にあわせてやる

大変なことをしてくれた

この意味での補助授受動詞はまさに非恩恵的行為である。これは「てやる」「てくれる」の「皮肉用法」である。このような場合ウズベク語で「～b bermoq」つまり「～てやる／あげる」の形は使用されない。

4. 3 「～てさせてもらう／あげる／くれる」

「させてもらう」の構造：させる（使役）＋もらう（受益）

「させていただく」の構造：させる（使役）＋いただく（受益）＋謙譲

「させていただく」は自分の行動だけについて謙譲語で述べるときに使われる。

「させていただく」の形式は次の意味を持っている。

1. 丁寧語（謙譲語）の意味

「させていただく」の形式は謙譲が必要な場合に役にたつ形式で、どんな動詞であってもこの形式に言い替えれば丁寧になると思われる。例えば、会議で開始を宣言したい場合などに、会議は自分一人で行う物ではなく、参加者も同様に行為者となることから、「会議を始めます／開始いたします」ではなく、「会議を始めさせていただきます。」のように言う人が多い。

始めます（中立的）＝始めさせていただきます（謙譲語、丁寧的）

2. 相手の許可を得るという意味

「今日はちょっと早く帰らせていただきます。」（相手から許可をもらって、帰る）

例えば、社長の許可を得た上で帰る時使う。しかしこの文章は次の意味でも用いられる：

3. 相手の意志に反して何かの行動を実行するという意味

「なんと言おうと今日はちょっと早く帰らせていただきます」（聞き手に選択権を与えず、強い意志で自分の行動を断定する）

どちらの意味でもこの形式は待遇的配慮を含んだ表現である。

しかし、1の意味の「させていただく」という表現は相手を不快にさせてしまうこともあると考えられる。謙譲語で言おうとしたのに自分が相手の意志に反して行動しようとしているとも誤解されてしまうこともある。なので、丁寧語とか謙譲語で自分の行為を述べる場合、「お～する」とか「(漢語) いたす」を使うこともある。しかし、「お～する」の表現は単純な謙譲語でない。話し手が聞き手に関係ある行動、多くの場合は合何か利益を与える行動に使う。だから「今日8時にお起きした」という文章はおかしい。話し手の行動は聞き手に関係ない、しかも聞き手の利益にならないからである。一方で、「お中元をお送りします」は使える。送る行為は聞き手の利益になるからである。

「(漢語) いたす」は公式的な言い方であるとも思われる。例えば、「始めさせていただきます」と「開始いたします」の両方も「始めます」の丁寧的な言い方であるが、ちょっとした相違点を持っている。例えば、「始めさせていただきます」はカジュアルな言い方で、オフィシャルな場面では「漢語+いたす」の形式を使った方がいいと考える年配の人もある。

「させてもらう/いただく」を「させてもらえる/いただける」「させてもらいたい/いただきたい」「させてもらえる/いただけるとありがたい」の表現に変えることができる。この表現は相手に違和感を与えることはない。

意見を言わせていただきます。 →意見を言わせていただけませんか。

→意見を言わせていただきたい。

→意見を言わせていただけるとありがたいです。

「させてくれる」「させてあげる」も同様に許可を求める表現で、待遇的配慮の意味を持っている。「させてあげる」の場合話し手は聞き手の行為の実行に許可を与える。

—行きたいなら行かせてあげるよ。

「させてくれる」相手が話し手（私）に行為を行うために許可を与えたという意味を持っている。

—行きたかったことを分かって、行かせてくれた。

ウズベク語で「させてもらう/あげる/くれる」と同じ表現がないので、英語の「Let smb. do smth」と同じ表現になる。日本語の「させてもらう/あげる/くれる」の三つの表現は一つの「ruhsat bermoq」(ruhsat—許可、 bermoq—あげる)になる。ウズベク語での表現を日本語で直訳で言えば「誰かに何かをするのに許可を与える」になる。

—行かせてもらいました ←

—行かせてあげました ← borishga ruhsat berdi.
—行かせてくれました ←
(borishga—行くのに、 ruhsat—許可、 berdi—与えた、あげた)

まとめ

日本語の授受動詞をウズベク語の授受動詞との対照で見えてきたところ、両方の言語で類似点があることが分かった。しかし、特に日本語の授受動詞には様々なニュアンスが伴うことに注意が必要である。日本語の授受動詞の第一の特徴は三つ動詞があることである。多くの言語には、ウズベク語も同様で、二つしかない。例えば、英語で「give, receive」、ウズベク語で「bermoq, olmoq」、ロシア語で「давать, получать」。第二の特徴は日本語の授受動詞には恩恵の意味が含まれていること。なので、授受行為が恩恵的かどうかには注意が必要であり、恩恵的であれば「やりもらい」を使えるが、そうではなければ他の中立的な授受動詞を使った方が自然である。さらに日本語の授受動詞には「皮肉用法」もあることを考慮しておいた方がいいだろう。

補助動詞としての授受動詞は日本語、ウズベク語両方にあるが、日本語に「てもらう」という主観性を中心にしている表現があることが、それぞれの言語にそのまま訳せないことの原因であると考えられる。「てもらう/いただく」は利益、恩恵を受けるという意味以外には「指示」、「依頼」、「願望」の意味も持っていることは日本語授受動詞の特徴である。

日本語とウズベク語それぞれの授受動詞が類似していることは学習者の文法学習を容易にするが、それぞれの形式にはニュアンスの違いがあるので十分注意が必要である。

参考文献

- 大江三郎 1975 「日英語の比較研究-主観性をめぐって」 南雲堂
石綿敏雄、高田誠 1990 「対照言語学」 桜楓社
新美和昭、山浦洋一、宇津野富久子 1987 「複合動詞-外国人のための日本例文 問題シリーズ4」 荒竹出版
庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘 2000 「初級を教える人のための日本文法ハンドブック」 スリーエーネットワーク
庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘 2001 「中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック」 スリーエーネットワーク